

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年八月二日 横浜定例講演会より

『黄金の扉を開け (二)』

喜びのある 先祖供養を

私達は神の子であり、神様は人類の親であるという話をよく致します。私達自身には必ずご両親がいます。その両親にもまた父母がいます。祖父母です。母方にもいます。このお父さんの所にもまたご両親がいるわけです。書いていると際限がない。こういうふうにしてドンドンドンと広がっていくわけです。

ですから、『ご先祖様』というふう到我々は一口に呼んでいられるけれども、こういうふうにして広がりが出て行くわけです。

一つの家筋だけを追っていくと、自分のお父さんの姓を名乗っているとする、お父さん、そのまたお父さんと辿っていくと、段々段々とう広がって行くわけです。そうすると何々家の祖霊祀りということの先祖供養をして差し上げるけれども、極端に言えば何々家としてここ迄をするのだったら、こちら(母方)は全然受けていないことになる。

そうすると、今度は「お母さんの方の家筋の方もされると良いですよ」という事をお伝えしてあげると良いのだけれども、これを強制したり、義務としてさせるのはまた意味が違う。いわゆる宗教団体はそこを強制するのです。折伏と言つてね。先程言つたように、しないよりは良いかも知れないけれど、強制しているから神仏のご加護が入りにくいのです。強制されて嫌々やっていると、義務でやっている、ご加護が入らないのです。

祖霊祀りを喜んでしているお家筋の場合はこういう形でいい。しかし、これがさらに次の代になると、これのまた倍になる、そのまた倍になるということで、倍々ゲームの様になっていくわけです。

お一つの家筋でお位牌に入るだけでも最低で一億以上という言い方をしているわけですから、お位牌に入っていない人の方が今は七割あるとすると、最低一億としても七億以上の方がいる。でも実際にはそんなものではありません。大体数十億から数百億の方がいらつしやる。昔はもつと大勢の人でしたから、何兆というふうな数の方もいるわけでございます。

すべて大神様の の一点から

しかし、倍々倍々でドンドンドンとどこまでも増えていくかと言うとそうではない。一定の限度を超えた時には、今度はこれが逆にこういうふうに戻って来るのです。祖神の所へ行ってその祖神の所から先は逆に減っていく。何故かと言つたら、全ては大神様の一点にて大神様の所からお生まれになった神々様の所からの発生になっていくのですから、元は大神様の所に行つて終着駅になる。

そうすると、私達は『すべては一点より発し、そして全ては一点に還る』という事を聞いているけれども、これは何も朝日、夕日の話だけではない。

あの時、弘法大師様が『すべては一点より発し一点に還る、と言っても分かりにくいでしょうから、その時には朝日、夕日を想定してみなさい。そうすると、真っ暗闇だった時に、白白としてきたと思うと、太陽が昇ってくる。その時その太陽の光はすべてに、光を発していつて世の中が明るくなる。だから一点より発する。そして昼間を越えて、夕焼けというかそうしたものが過ぎていった後に、夕日が水平線・地平線に沈む時というのは、すべてその一点に還ってまた暗闇になって還っていくというふうに想定すれば分かりやすいでしょう』ということで、一つの例として言って下さっただけであって、朝日・夕日だけが一点より発し、一点に還るのではなくて、私達人類そのものも自分を中心に見ていった時に、両親がありそして更にお祖父さんお祖母さんがいて、そしてその上のお祖父さんお祖母さんがいて、というふうに先祖を通していった時、究極の所へ行ったらまた大神様の一点に還るのです。

神々様といえども大神様から発したのであって、そうすると、『すべてのものは一点より発し一点に還る』ということになっていくわけであって、そういう意味での祖霊祀りをきちっとしていくと、すべて大神様の一点へ還ってくるのです。

だから姓の異なる側の人を強制する必要はない。そこを通じてまた戻って来ればいいのですから。強制ではない。しかし皆さんが自主的・積極的に喜びをもって、各家がなさられば、これが

どの家筋を通っても、自分に関係のある家筋全部が大神様の所の一点に辿り着きやすいということなのです。

それは逆の意味で私の体験から受けさせて頂いた事と、私がたまたま藤原の姓に産まれたわけですから、かつて藤原家というのは、天児屋根神様を祖神にし、いわゆる春日大社の三の殿の神様を祖神にして、神々様の世界において祝詞とか、神々様の世界の事を一手に扱ったお方だから、そなたもその役を行えと言われたわけですから、他の方より早いというだけです。自分がやる気になったらそれでよかったです。

本当の意味で分かっているかどうかは分かりませんが、御皇室のお方、或いは五摂家のお方が、やはり伊勢神宮の大宮司になられたり、或いは日本の主だったお社の所の宮司などを、格別に神道の教育を受けて下さいと言って頼まれていくというのはいくつかあるからです。

それはそういう家筋であるからです。それはそういうお家筋の人は、神様に通じやすい何かを持っていて、あるであろうという前提と、もう一つは名家であるということでの箔をつけるということをしているのだらうと思えますけれど、少なくとも私の場合は神様から直接「かつての藤原家の血筋を引いている者であるから、神に仕えた家筋のものであるから行え」というのが、私がむしろ色々とお伝えを頂いた時に、畏れ多くてもそんなことは出来ない、何の修行もしていないからということでお断りをした時に言われた言葉でございます。

しかし皆さんだって、全て人類は神の子である以上、皆さんの側がその気になった時には、どのお方でも出来るようになっていくのです。ただ方法が解りにくいということがあるかと思いま

す。全ては同じです、何事でも。

例えば富士山に登るのでも、吉田口から登るか、須走口から登るか、或は北口から登るか、色々な登り口があるわけですから、その自分に合った方向から登れば良いわけです。そういった事がなかなか分かり難いという形になっています。自分という一点と、大神様という一点を通していけば、あつという間に繋がるようになっていくわけです。

ただ今まで分かりにくかったのは、この祖神の所からこの辺りからは、いわゆる大宇宙へ全部神々様がお出かけになられて、地球上にはいらつしやらなかつたという時期があるのです。昭和三十七年まではお留守だった。そこで天岩戸伝説のようなものが起こってくるわけです。天照大神様は男性神であつて、お妃様が十二名いらつしやるにも拘わらず、またその中の瀬織津比売様が速開津比売様というお二方は祝詞の中にさえ出てきておられるにも拘わらず、神々様が大宇宙へお出かけになられたので、それを天岩戸にお隠れになつたという物語に変えただけであつて、そこからは天照大神様がお出ましになつた時にはもう女性神としてというふうになっている。

これも前に「十字の教え」でしましたけれども、復習するとすれば、いわゆる縦が「男性」、横が「女性」。縦が「太陽」、横が「月」とこういうふうになっている。それで「太陽系の神様は全部いなくなつたよ。だから月の世になりますよ。男性としての神は皆、大宇宙へ行きましたよ。だから出てきたものは女性ですよ」という風な、隠れ事になっていただけの話ですね。そういった所が解らないという事になつたかと思ひます。

建物が廃屋になるわけ

今日は色々な事に謎解きみたいにお話いたしますから、いきなり話が飛ぶかも知れませんが、先日神世七代（かみやななだい）の三代にあたる大濡煮神様、少濡煮神様の所へ行つてきたのですよ。日成ヶ岳、滋賀県と福井県の県境にある。

現在は「百里ヶ岳」と言っている。古文献には「ひなるがたけ」となっている。一生懸命探したのです。むしろ越中の立山あたりではないかと一生懸命探したけれど解らなかつた。大濡煮神様、少濡煮神様というと分らないけれど、大濡煮神様、少濡煮神様のお名前は、若い時は桃雛木・桃雛美と言つておられました。百は「もも」と読むのです。桃雛木神様・桃雛美神様のいらつしやる里。神様はここにいたよという。わかつてみればコロンブスの卵みたいなものですけども、なかなかわかりませんでした。

その百里ヶ岳の手前のところにある部落。かなりの大きなお家であつても、皆ボロボロになっている。廃屋になつてしまつて、傷んでしまつている。「何でこんな大きなお家が・・」というふうに思つた。皆さんも「人が住まなくなるとお家が壊れ易いよ」ということを言われると思う。それは湿気であるとか、風通しが悪いからというので、管理人さんに頼んで「たまには窓を開けて下さい」というような事をやつて管理をしているつもりになっているのです。そうでしょう、大体が。でも傷むのです、家は。

早い話が、伊勢神宮のあれだけ立派な檜造りの御社が、二十年で傷んでくるのです。何故だか解りますか。檜造りの素晴らしい社屋ですよ。しかし二十年で傷んで、二十年で遷宮をしているでしょう。色々な学者の説はあるんですよ。あれは神主さんにして